

# シューベルトの《魔王》

## —鑑賞教材を通じて形成された作品像—

聖徳大学音楽学部 山本まり子

本発表は、フランツ・シューベルト作曲《魔王》を対象とし、この作品が日本の音楽教育における鑑賞教材として果たしてきた役割を考察することにより、作品の成立事情や芸術的評価とは別の文脈で、日本独自の作品イメージを醸成してきた歴史を検証することを目的とする。

鑑賞教材としての《魔王》は、ヴィヴァルディの《春》やスメタナの《モルダウ》と並び、音楽から場面を想像したり、気分や物語の変化を感じ取ったりする活動を学習目標としている。この作品の学習は、早世した歌曲王シューベルトや文豪ゲーテに触れる絶好の機会ともなる。

さて、クラシック専門ラジオステーション「OTTAVA」の一コーナーで今年、「学校で聴いた、学校で聴かされたクラシック」のリクエストを募ったところ、《魔王》に圧倒的な人気集中したとのことである。また、携帯型ゲームソフトのテレビCMで、《魔王》の作曲者を出题する場面が放映されていたのは記憶に新しい。さらに、YouTubeに多くの《魔王》の音楽映像がアップされているのも、社会的に《魔王》が広く浸透していることを裏付けている。これらの現象は、鑑賞教材としての《魔王》が中学生に強烈な印象を与え、授業で学んだ音楽の代名詞として受け継がれてきた音楽教育史の証だと言っても過言ではないだろう。

こうした現実を踏まえ、本発表では次の2つの側面を総合的に考察することによって、鑑賞教材の《魔王》がシューベルトの芸術歌曲とは別の文脈における作品像を形成してきた歴史的経緯を提示したい。

### (1) ゲーテの詩“Erlkönig”成立から日本における「魔王」の訳にいたる伝承・受容系統

先行諸研究によって、そもそも《魔王》の詩はデンマークの民衆歌謡に由来することが判明している。そこで歌われていた「妖精の王」“ellerkonge”をヘルダーが民謡集に取り込み、「ハンノキの王の娘」“Erlkönigs Tochter”とドイツ語に誤訳した。ゲーテがこれを下敷きにして“Erlkönig”を書き、シューベルトが作曲したのである。一方、日本での《魔王》の歴史は、ドイツ文学の受容史、特にゲーテ作品の翻訳史と密接に関わっている。ゲーテの“Erlkönig”が明治期に「魔王」という訳語へと移された瞬間、日本において独特な作品イメージが形成される素地が生まれたのである。

### (2) 日本の音楽教科書における《魔王》の変遷

モーツァルトの作品が明治期以来、教科書（唱歌集）の中で姿を変えながら紹介され続けてきたように、夭折したシューベルトも偉人として位置づけられ、彼の歌曲は日本語のさまざまな訳詩をともなって歌われ続けた。《魔王》もまた、その歴史的座標に置くことができる。そこで、《魔王》が共通鑑賞教材として定位置を獲得し、広く学びの対象となった経緯を、歴代の教科書と学習指導要領を使って検証する。